

名家を訪ひて

美術界の傾向(上)

黒田清輝氏談

▲近來ハ大分下火になつたが一昨年ノ戦争以來繪葉書が盛んに流行した。之ハ一つハ遠く戦地にある人々を慰めるに最も其形が適して居たのと、一つハ一般ノ青年學生等が星だの董だのと騒いで居た時代で、是位の分り易い趣味のものが恰度彼等の嗜好に投じたからであつたろうと思ふ。

▲繪葉書ノ如きハ勿論美術上ノ製作として重んず可き程ノものでハないが、之が流行した爲に低い乍らも廣く社會に美術思想を普及した効ハあつたに違ひない。けれども美術家ノ側から云ふと、恁んな小さな骨ノ折れないもの許り描いて居た爲に、自己ノ志す研究或ハ製作を碍げられたノハ事實である。

▲處が繪葉書ノ畫にハ極めて妙なものがあつて、中にハ日本畫だか西洋畫だか分らぬのがあり、極端なノハ日本畫ノ筆で西洋畫ノ形許り描いたのや、西洋畫を描いて影も日向もないのがあつた。だから一寸見ると繪葉書に依て日本畫と西洋畫とが折衷された様に見える。けれども之ハ決して折衷されたと云ふのでハなくて、兩者ノ筆ノ末ノ肖た所が相混じたと云ふに過ぎない。

▲改めて茲に云ふ迄もなく日本畫も西洋畫も各々別種ノ特色を有つて居る。更に細かく云へば日本畫の中でも各派が皆な特色を有つて居る。即ち此特色が貴いので、夫ハ決して折衷されたり調和されたりするものでなくて各々唯其特色さへ遺憾なく發揮すれば足るのである。

▲或る人の如きハ、もう少し西洋畫を應用して日本の家屋をも飾る途ハないかと切り^{しま}に考へて居る様だが、之に就て自分等ハ甚だ疑を持つて居る。元來美術ハ建築と密接な關係を有して居るので、西洋の家屋に適した油畫を直ちに日本の家屋へ持つて來たり、日本の掛物を西洋間の壁へ懸けたりするのハ、唯徒らに不調和なものが出る丈で、お互ひに其美を損じて終ふ。

▲例へバ日比谷公園の眞中で二挺や三挺の三味線を弾いた所で何の感興も與へないが之を春雨細き宵等に四疊半なんかですれば一挺の爪弾さへ趣きが深い。若し其處で喇叭等を吹いたら全然^{まるで}聞かれたものぢやないと同じ様に、繪畫も其所を得なければ逆も其美を發揮するとハ出來ない。

▲恁んな風に、油畫なり水彩畫なり、日本畫で云へバ墨繪でも繪卷物でも、總て其所を得て初めて美を發揮するのだらう。之ハ分業法に依て各々長ずる所に進んで行く可きで、愁ひ折衷や調和を企てたら却つて其特色を傷けはしまいかと思ふ。云ふ迄もなく油畫の如きハ近く見る可きものでないし又光線の工合が悪ければ其美ハ全然沒了されて終ふから、光澤^{つや}を消したり筆を細かにしたら或ハ日本風の床の間にも飾られぬとハ云へないが、斯てハ矢張り其特色を失つて終ふ。一言に云へバ恁んなどハ全く無益である。

▲近頃西洋畫が頗ぶる盛んになつて來たので、其爲に在來の日本畫が何となく壓倒されて居る様に見え、尙西洋畫の愈々盛んになつて行くに従つて、日本畫ハ衰へやしないかと云ふ疑もあるが、夫ハ杞憂で其特色を維持して行く以上西洋畫の進むと共に並行して行くであらう。

▲現在の如く西洋畫を習つて夫を翻譯して居る時代ハ已むを得ないが、西洋畫と云つた所で吾々ハ唯其描方を習

ふに過ぎないのだから、漸次進んで行けば今の西洋畫即ち日本畫なので、今の日本畫が其初めハ支那畫であつたと少しも違はない。だから折衷も調和も要らないから兩者共に飽く迄其特色を發揮しつゝ進ませたいのである。

▲處で我國に於ける古來の美術も貴いにハ違はないけれど、之ハ唯遺物たるに過ぎない。例へば刀の鏢や目貫等でも其當時の需要に依て生じたに過ぎないので、價値もあり鑑賞するにも足るが。然し現在及び將來の美術と何等の關係もない。尙古から長い間にハ敬仰す可き大家も少くハなかつたが兎に角茲に西洋畫も入つて來、世界で誇る可き美術の花の大和島根に開くのハ實に是からだと思ふ。(噴水記)

『読売新聞』明治三九年四月三日